モンゴルの春 人類学スケッチ・ブック

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>小長谷 有紀</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1991年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10502/4579">http://hdl.handle.net/10502/4579</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
死ぬまで乳をやるだけのこと

第十八日め（四月二日）

午前七時の気温はマイナス十五度。きょうはことのほかさむい。群れから子ヒツジを三匹ひろい、こ
れをみせながら三頭の母ヒツジをおびきよせた。もうおなじみの朝の風景。

午前八時、朝のお茶をのんだあと、哺乳タイムの作業にかかる。きのうの夕方、エルデニチメグ姉さ
んは、ふつうの子ヒツジ三匹をえりわけて、柳条製のかごに入れられた。彼女は、乳母に明るく利用するヒッ
ジを選定し、あらかじめその子をとりわけたのである。夜のあいだに哺乳してしまわないように、
乳母を一匹のヒツジの子を母からひきはなした。いつも、オンチンたちもまた、むやみに乳をぬすみ飲み
ないようになろうと、ヒツジの仲をさしたのであった。柳条製のかごのなかには、五匹の子ヒツジ。乳
母にさられるメスの子と、乳

このころになると、オンチンたちの養育対策には、一定の方針がさだまっていた。朝はヒツジに、夕
はヤギに、という乳母の選択である。すでに、出産したヒツジの個体数は三十をこし、ヤギは十に達し
た。適当な乳母がいないとモージは嘆いていたが、ほぼ固定した乳母を利用するようになってきた。朝
はヒツジをとらえて乳母とする。そのために、子ヒツジを夜間分離しておく。夕方は放牧からかえって
きたヤギをとらえて乳母とする。子ヤギたちは石垣内にとどめおかれているので、放牧からかえってき
たヤギが実はにあまえに、乳母とするのである。
正午頃、気温はようやく少しの温度を上昇。東から見上げる小さなゲルからヒッジの鳴き声がとれ
こえ、小さなゲルには、「老いた母」という遊び名のホクシン・エージがすんでいた。彼女は、この
宿営地にすむ住人のなかで、ただ一人タバコをする人であった。
屋内にいれられた子ヒッジは、きのう放牧地で出生したもの。主人公のソルトはこの出生をみの
した。子ヒッジだけがほんとうから発生したのだろう。ところが、帰郷した群れ本隊のなかに、名のりをあげる母
ヒッジがいない。子をもってメイメイなく母がない。すっかり、放牧中の確認がおろそかになっ
たのである。そして、さすがのためその子ヒッジの耳は凍傷になっていた。
耳が凍傷になった子ヒッジは、尾がやや細くて長い。こう見るとヒッジは、成長してもたっぷりした尾
にはならない。脂質のかたまりの尾をもつ、いわゆる脂質尾ヒッジとは種類がちがう。ヒッジとよばれる
毛は、毛質で毛の品質を示す。一頭あたりの羊毛生産量な在来種との混血である。
改良種の長所は、羊毛の品質にすぐれ、人びと、メリ
リーズこそよい。細毛を意味するミラ・ノースという語句と、混血を意味するエルリーズという語彙を
合成して、メリーズとよんでいる。細毛種とよばれる改良種は、現在のところ、経済的に有利なはずの評判が
あり、エージは批判する。少なくともダウゼン家では好まれていない。子の面倒見のわるさが欠点とし
tて指摘される。ところが、ホクシン・エージ老婆の所有するヒッジはすべて、改良種もしくはその雑種
であった。メスが改良種でも、種オースにおなじく改良種選択されていないかぎり、つぎの世代は雑種
改良種のヒッジに介添するホクシン・エージ

制定することによって、経済的な有利さはやや減少する。一方、子の面倒見が労を要するという点は、改良種を好まない上に、その面倒見を好まない。

子の面倒見が済む母ヒッジにすてられた尾長い子ヒッジ。これは、まぎれも少なく、ここでは好まれていない種類のヒッジである。ホクシン・エージ新生のヒッジから生まれたものであった。彼女はタバコをすいながら、あわれな子ヒッジをかたる。

「ええ。暖かくなったら耳がおちるんだよ」

凍傷にかかった耳はかたい。やがてもっとうなって脱落し、小さな耳のヒッジになるという。'

「はい。ここ母ヒッジをみつけてきて、乳をさせ」

「はい。わたしたしのヒッジをきらってるだろう。おまえ聞いてるだろう」

ヒッジをかたりながら、彼女は自分の人生を語りはじめた......
彼女は、分家の嫁トヤの実父の妹である。トヤからみれば、「アプラガー（父方の母）」に
まりおばに相当する。いっぱい彼女は、モージ母の三歳上の兄の嫁であった。義理の姉であったから、
モージよりも年下なのに「アプラガー」ということを敬称で呼ばれる。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致される。モージの兄である彼女の夫は、日
本軍にいたということに、一九四五に
“どうせ死ぬにきまっているさ。死ぬよ。”
というのは、翌日もこまれた子ヤギ。

“もう死んだんだろ。動かないものね”
と、その日のうちに子ヤギは死んだ。彼女のゲルで子ヤギたちが死んだのは偶然にすぎない。たまに彼女たちが死ぬだけのことである。しかし、偶然になければ、彼女たちのゲルには、死ぬ子ヤギがちかって小さな子羊たちがいない。それで、瀕死の子ヤギが彼女のまわりにあつまってしまう。結果として、彼女のまわりに死ぬだけのことなのである。それでも、ほかの人なら、家畜にすることには遠い、やがて眠るだろう。瀕死の子をみて、死ぬまで乳をやるわけではない。

非必須には、乳をやるだけのこと

“いつも死ぬよ。不要な子ヤギだ。母ヤギに
は乳もない”
寄乳（ザギサハ）とは、実母にわざと、さらに別の母から哺乳させてやることを意味している。したがって、いままでみてきたような孤児に対して乳母をあてがえようとする場合には、母を用意することを意味している。したがって、乳母をあてがえることを意味している。

ザギサハという特定の動物がちやんと存在している。特定の養育技法をさした動物がちやんと存在している。これには人びとはユアーレフ（お乳をのませる）という動物がちやんと存在している。ユアーレフの語でさまざまな哺乳補助作業を一括して語ることを意味する。ユアーレフの語でさまざまな哺乳補助作業を一括して語ることを意味する。

彼女は、寄乳をこころみた。しかし、彼女の所有するヤギ・ヒツジのなかに、乳母として適当なものがないかった。だからこそ、彼女はそれをしまなかった。そして、それを依頼することさえしなかった。彼女はただ自分の家畜の範囲内でつかまえやすいようなものをつかまえ、寄乳したのである。その結果、子ヤギはすっかりお
とろえ、やがて致命的な乳不調をきたすことになる。

一人の子を育てたモーリ・母さんとは対照的に、一人の子どもがいたなかったホクシン・エージ母さん。容

易に子育育てをあきらめるようなところがあっただ。それでも、わたしにとっては、モンゴルの伝統的な

子育育てにかんする良き先生であった。わたしは彼女から多くを学んだ。彼女は、わたしのためにや

かったからである。

午後四時、年始まわりのために三月二十五日に出発した人が帰る。ラクダのり、ヤギの皮をひさに

かけ、ふところでヤギをだいて帰る。ヤギは、放牧地でひろったもの。その母ヤギは、不明。帰宅

するなり、矢絣ぎはやに質問する。

『出産作業はどんなもんだ』

『死んだのはなにか』

ウマのたてがみ切りには何人きたか

まるで、わたしの事情を知りながら聞いている。聞くはわずかしかし確認する。

乳製品を天地にふりまいた。母はまずわたしたちを確認する。

ずうっと額

にしわをよせながら聞いている。聞きおわると、戸棚から乳製品をとりだし、少々手につかんで戸外に

でる。ぶつぶつぞさみながら、乳製品を天地にふりまいた。母ヒッジ二頭をうしなって以来、なん

かおちつかない父は、ときどきそうして大地に祈る。これ以上は不調がないように、祈っているのだと

思う。